

(23)	前掲書	一四一—一四九頁
(22)	前掲書	一三五頁
(21)	前掲書	一一八頁

国霊や、水霊の活動する国見山からのぞむことのできるおのれの国原としての領域としての平地であり、中心・焦点としての国見山により組織づけられる。これはまた秋津洲ヤマト型空間と同じ限りある地域を意味するものであった。⁽²³⁾

これらの記述は俗的な領域からと神聖な場所を見るといふ行為の対象の場所、また神聖なものによつてことほがれた地という二重の視点を有している構造を指摘できる。それは神奈備型、国見山型空間の場合とくに顕著に考えることができる。だが、蔵風得水型、八葉蓮華型、秋津洲倭型では神聖性を説き隠処型では空間として人間がそこに存在できることを保証してもらえらる構造をとろうとし、人間と自然の異なつたあり方をさぐるものとみることができるといふ。つまり、これら景観の視点は、集落とそれにかかわる聖なる空間の認識に通じていくとみなすことが可能となる。

(未完)

註

- (1) 拙論『北設楽の花祭り』宗教研究 第五八巻一輯・日本宗教学会 昭和五八年
- (2) 拙論「仏教的宇宙観の日本的受容について 東海仏教33(北設楽の花祭Ⅴ) 東海印度学仏教学会 昭和六三年
- (3) 拙論「神道(カンミチ)にみる方位の思想的背景(北設楽の花祭Ⅱ) 行動と文化8号 行動と文化研究会 昭和六〇年

- (4) 拙論 東海学園女子短期大学 紀要 第二五号一―二八号
- ① 水のコスモロジー……異界との接点としての水辺(1) 天竜水系の伝承を中心として…… 紀要 第二五号 平成三年
- ② 水のコスモロジー……異界との接点としての水辺(2) 常陸国風土記を中心に…… 紀要 第二六号 平成四年
- ③ 異界への道標としての水……水のコロモロジー(3) 日本書紀を中心として…… 紀要 第二七号 1992年
- ④ 異界への道標としての水……水のコスモロジー(4) 水の神・生成の神としてのスサノヲ 日本書紀を中心として 紀要 第二八号 1993年
- (5) 樋口忠彦『景観の構造』―ランドスケープとしての日本の空間― 技報堂出版(1975) 1983年 五刷 八四頁
- (6) 三谷栄一「日本文学における戌亥の神の信仰」『実践女子大学紀要』第四集 昭和三二年 一八頁
- (7) 縮刷版 宮地直一・佐伯有義監修『神道大辞典』臨川書店 昭和六一年(縮刷復刻)
- (8) 上田篤『鎮守の森』鹿島出版会 昭和五九年 三九頁
- (9) 前掲書 四四―五五 頁
- (10) 上田『空間の演出力』筑摩書房 1985年 七頁
- (11) 前掲書 九頁
- (12) 前掲書 九頁
- (13) 拙論、註4の3 一〇六頁
- (14) 井本英一『境界祭祀空間』平河出版社 1985年 二七頁
- (15) 前掲書 一二七頁
- (16) 樋口 前掲書 八五頁
- (17) 前掲書 八七―一四七頁
- (18) 前掲書 八九頁
- (19) 前掲書 一〇六頁
- (20) 前掲書 一一二―三頁

周辺平地の眺望に資した。神奈備山が周辺の平地から仰ぎ見られる山であるのに対し、国見山はそこから周辺の平地を俯瞰する山である。

樋口忠彦はこれら七の型をさらに詳しく分類し⁽¹⁷⁾そのことについて述べている。

ところが、これら七の分類について記するところは視点を交えてみれば水の流れ出す源流、あるいは祖霊の住む地区と現世の人々とのかわりについて述べていることに他ならなくなる。それらのことは以上の七の分類について次のようにふれられていることによる。

①水分神社型では常に田地を見守り、農耕者はごくわずかな傾斜をもった田地から、仰観気味に神の坐す社を見やる。ここには、神と崇拜者との「見る」「見られる」という一体的な視覚関係が成立している⁽¹⁸⁾。

②秋津洲やまと型空間では字義通り、かこい・垣根としての青垣山である。外界を仕切り、内に心安らぐ浦安の国という空間領域をつくりだしている境界としての「はたらき」をしている⁽¹⁹⁾。とした上で、境界設定を人間が本質でないものの中で溶解しないためには必要であり、人間の内的平安を約束してくれるものとしている。

③八葉蓮華型空間については蔵風得水型、水分神社型と似ていることが確認され、外界を仕切り、内に空間的領域をつくりだす境界と

してのシンボル化された目標・ランドマークとしての空間を組織づけている⁽²⁰⁾。これらで触れたように人間の内的平安を約束してくれるもの、あるいは心安らぐ浦安の国という空間領域を確保するわけであるが、そこには湧水、枯れることのない井戸、あるいは水の存在を考慮しておかなくてはならない。この問題は、さらに述べる他の空間型でも現れて来る。

④蔵風得水型空間。これは現実的意味においては日当りがよく、背後に山があることによって風が吹き抜けず、また山に近いために南下がりの緩斜面で眺望が備わっていることになる⁽²¹⁾。そして、山（集落の三方）と水（集落の南）によって空間が区切られていることを示している。

⑤隠国型空間

両側から山が迫る谷間である。この谷間の奥は川の水源があり、そこは通路としての谷の到達点でもあり、同時に人間の居住領域に対応する他界の境目としての場所になる⁽²²⁾。そこは、水分神社のように社殿、祠、寺院が営まれるのは他界との境目に当たり、死者の霊が高く昇っていく結節点だからであるという。次の、

⑥ 神奈備型空間

⑦ 国見山型空間

もこれらの空間の形態は先のものとは異なり、平地に孤立した中心・目標により組織づけられた空間と言える。そして、国見山型の場合

界に関する側面を現していると言える。少し長くなるが引用してみる。

(一) 水分（ミクマリ）神社型

山から流れ出て来る水の田への最初の引き入れ口である水口、山から山麓の緩傾斜の地にうつる勾配変換の地の山側の丘陵端に神社は位置し、そこからごくわずかな傾斜をもって広々と田地が裾をひく地形である。神社に向かって奥まりながら周囲を取り囲む山、緩傾斜の田地、神社と田地を区切る川の構成する空間である。

(二) 秋津洲（アキツシマ）やまと型

周囲を青垣山が取り囲み、そのうちに清流の流れる明朗広潤な平野である。『日本書紀』が神武東征の目的地の空間を「東に美き地有り。青山四周れり」と描いたように、古代人のあこがれ求めた理想境「常世」の地形空間であった。平野とそのうちを流れる川、そして周囲をとりかこむ山の構成する空間である。

(三) 八葉蓮華（ハチヨウレンゲ）型

あたかも胎藏八葉の蓮台を表示するように、周囲を八つの峰が取り囲んでいる地形で、それは空海の言う「四面高嶺にして人蹤みち堪えた平原の幽地」である。「秋津洲やまと」と違って標高が高くなつた深山であるが、周囲を山により囲まれている空間という意味では、同じタイプに属する。

(四) 蔵風得水（ゾウフウトクスイ）型

占地（立地）の理論としての風水思想によるもので、地中に流通する正気（水）によってかぎられ、風によって散らぬ場所を吉としたものである。一般に、後方（北）に山を負い左右（東西）に丘陵を持ち前面（南）に平地流水を臨む地形を言う。占地（立地）の理論として大きな影響を及ぼすとともに、現実的意義もあつて、きわめてよく目にするタイプである。方位および三方の山と平地そして水の構成する空間である。

(五) 隠国（コモリク）型

両側から山のせまる谷川を上流にさかのぼった奥にある隠れこもった場所である。そこは死霊のこもる場所であり、聖なる場所でもあつた。両側から山のせまる谷と水の流れの作り出す奥へ奥へと誘う空間と、その目標としての谷の奥処のつくり出す空間である。

(六) 神奈備山（カムナビ）型

平地に近く、あるいは平地に突出した、山容が周囲から目だつ小形で、山崇拜の対象としての霊山であつた。この山は、周辺の平地のどこからでものぞむことができるということから、周辺の空間を集中化し、組織づけている。

(七) 国見山型

神奈備山と同様、平地に近くあるいは平地から突出した小山で、

*

さてこの参道を経て神社にいたるわけであるが、そこに祀られているのは必ずしも記紀などに現れてくる存在ではない。アマテラス、トヨウケノカミなど天津神的要素に分類できるものからオオナムチノミコト、倭猛など国津神的範疇にはいるもの、そして古墳あるいは陵などを背景にもつものなど、考え方によれば神社に祀られるものは神話的な領域から現実的範囲にまで及ぶ。宗教的施設はそこに単なる神を鎮座させるものではなく、そこに神と見なすものを招き寄せる場という見方を可能とする。つまり、トコヨにつながる場としての参道を歩き、その構成する空間をトコヨの一部と認識し、トコヨにつながるものとして参道上からトコヨを遙拝すると考えられるためにはこの世界とトコヨをどのように意識するかと言うことになる。つまり参道空間の極限にあつて、いわば自らの意識をトコヨへと送り出す行為がこの神社という接点においてなされることになる。この接点にいたる道筋は本来禁足地とされていた可能性はある。しかし、今回はそのことには触れないでおこう。

参道を経て、手水舎で手を清めることの象徴性にイザナキのユバリを連想させるとしたら不敬であろうか。この行為によって象徴的に川を渡ったことになるのではなかったか。社殿に至り、その前に立つと神社の面する方位と、そこにいるものとの間には向きとして一八〇度のずれが存在することになる。つまり、参拝するわれわれが北に向くとき、社殿は南に面することになる。

たしかに神社の社殿が面する方角は「南」というのが一般的であり、表1から考えられるように向きはまちまちであると言つてよい。しかし、東北に面するものはなかった。そのかわり、南西に面し、人々の参拝する方位が東北になるものはある。これまでおもに天竜水系に属する集落の神社の位置および方位を採取し、基準となるべきものを設定しようと考えたが、この考え方自体が誤っていた可能性がある。それは神社等の宗教的施設を集落の中で位置づけせず、集落全体が近接する他の集落との間での相違検討に眼を向け、共通性を見いだすことができるかどうかにかかわっていたことによる。つまり、集落そのものが一つの宇宙、あるいは世界として認識されている事を考慮しなくてはならなくなる。そうすることによって神社等宗教的施設の型がトコヨとの接点として機能する意味を読み取ることが可能となる。

以上、上田の著作をもとに参道のことについてみたが、集落で神社が設置される場所はただ単に景観的な問題からではなく、その背景にトコヨという問題が存在し、それは家のすぐ脇に存在するかも知れない異界の認識に通じていくのである。

III

日本における典型的な地形空間を樋口忠彦¹⁶は文献及び実地調査から(七)に分類することができるという。この景観からの分析も異

の問題で彼のするユバリを取り上げたわけだが、大樹のもとでの彼の行為があつた世と、この世を分け隔てる水になつたことに注目しておきたい。なぜならば、同じようにカムヤライされて高天原から追放されてくるスサノヲも水辺を伝つてこの人間界に現れてくることにこの世と異なつた世界とを分け隔てる共通した要素をみることができるからである。

境界の意味するの

ここで境界というものをどのようなものと理解するか、と言うことが課題となる。先に触れたイザナキ、スサノヲの現れ来るところは考え方によれば、この世との境のところを開かれた空間、あるいは穴からの来訪者と考えることができる。井本英一はこの境界を次のように考えている。

阿奈塞は、ほんらい祭文では「あな、さえのかみ」と読まれていた。それが「穴をふさぐ」の意味に移つていったと論じられている。この祭祀は、悪病・悪疫の侵入を防いで、地区の安全を祈るため行われた。本来の石ではなく、棒杭を削つた部分に祭文を墨書した辻札になつてゐる。杭を打ち込むことが、境界を打つことであり、地下にはいつた杭は、大地の穴をふさいだと考えたらどうであろうか。穴をふさいでも、それをあけることが祭の本質であるので、悪疫侵入を防ぐことと一見矛盾するようであるが、あなふさぎの神は、このような場合、その障害の力を期待されたのである。⁽¹⁴⁾

つまり、境界は常に生と死の二つの相反するものが対峙するとすると見なされることになる。そして、境界におけるシンボリズムは、二本一組の門柱に死と再生の対偶となつて現れる⁽¹⁵⁾と考えられるのは民俗の領域における死者を送る儀礼と新しくこの世に生まれたものを受け入れる儀礼や年中行事の二重構造といったものから考えることもできる。

境界においておこなわれる祭祀

ここでの祭祀は生と死を分かつもの、あるいは悪病・悪疫の侵入を防いで、地区の安全を祈るためにおこなわれたと考えられる。つまり、神と人との交流はこの接点で可能となり、そのような接点を日常の中でどこに認めるかと言うことになる。そこには改めて宗教的施設等を持つてこなくてもよく、水辺とその傍らにそびえる樹木あるいは磐の存在によつて現されるとみることができ。それは、逆に言えば神と人の交流が可能になる場を集落、あるいは家の近辺のどこに造ろうとするかと言つてもよく、家、集落がそのままの世と、この世の接点の近くに存在していることを暗示する。このことは「内」と「外」、そしてその境界をどのようなものと理解できるかと言うことに他ならない。

さきに触れたように「辰巳」の方向に外来者のくるべき道を設けること、そして入口のわきに厠を設けている事例を見ると家そのものをあの世とこの世にくぎる象徴性を見ることができ。

II

上田篤は『空間の演出力』の中で「鳥居」よりも「参道」のほうが実体的には古いと指摘し、歴史時代の文書の中に、こういう言葉がでてこないという。さらに、『大乘院寺社雑事記』でも、「本路」あるいは「本宮道」であったという呼称が一定していないことに注目している。そして、この参道は鳥居が今では神社に欠かせないものと同じくらい、あるいはそれ以上の重要性を有しシンボル性を持つていたという⁽¹⁰⁾。しかも、神社等宗教的施設において、そこに訪れる人が公道を外れ一の鳥居、二の鳥居、三の鳥居へと進み、手水舎で手を清め廻廊、拝殿、玉垣、正殿、御神体の鏡というふうにしてその歩を進めるにしたがい、徐々に日常世界から隔絶され人は自らの意識が昇華して行く感を持つ。元来、参道を含めた神社空間は目に見えない、いわば神の啓示を受ける道としての意味あいを持つていたものと思われる。つまり、神社空間の中で価値を持つのは社殿でも社叢でもなく、参道であり。参道あるいはその延長において、はじめて神と人との交流が可能になるという⁽¹¹⁾。

彼はさらに神社の参道を通して次のように日本人の空間の意識にふれている。この参道の中に、日本人の神社空間あるいは信仰空間の本質があるという。すなわち神社空間は、祭時には、そこで神と人とが交合する場という意味を持つているが、それとどうじに、日常不断には、そこから常世の世界を遙拝する、という行為を通して、

人々は自らの願いをトコヨに馳せ伸べようとする。したがってそれは、「遙拝の道」としての意味合を持つていけると言える。参道は、とりわけその「遙拝の道」なのである。そして神社とは「常世の国」へとつながる一つの道しるべなのである。これは、どこか特定の地点を指し示すものではなく、つねに、到達した地点のその先にあるものを示すが、ここに空間意識の特徴をみる事ができる。

この常世と言うものが何をさし、何を意味するかを考えなくてはならないが、ここではトコヨとは海のむこうのきわめて遠いところにあると考えられていた想像上の国……理想境、神仙境ではなく、白鳥蔵吉の指摘するようにトコヨとは常節、つまりどこまでも節の尽きないことをさすのであり、それ自体が永遠の道行であるという。そしてこの永遠に終わることのない世界が具体的に表現されてくるのが参道であって、人々が参道の構成する空間をトコヨの一部と認識し、トコヨにつながるものとして参道上からトコヨを遙拝すると考えられることとなる⁽¹²⁾。つまり遙拝は参道空間の極限にあつて、いわば自らの意識をトコヨへと送り出す行為であり、神社はこのトコヨへの接点と意識されることが出来る場になる。このことは『古事記』、『日本書紀』にみる黄泉国、高天原をどう理解するかと言うこととなる。はたしてこれらをトコヨと言う言葉で読み代えができたとしても高天原から追放されたスサノヲがどういう道筋からこの世に現れ、また黄泉の国を訪れるイザナキはどのようにしてそこに至ったかを考えることとなる。このことについて拙論は『水のコスモロジー』⁽¹³⁾で泉津醜女たちに追われて逃げくるイザナキ

状況から「やむを得ず」そのように建立されたものと見なされてしまふ。だが、そのように建立・設置される背景には集落の地域的特性あるいは地勢的特徴ばかりではなく伝統・土俗的信仰の問題が絡んでいるというのが本論の主旨である。

* * *

神社の面する方位そのものについての資料はいまのところ知らない、次の表は『神道大辞典』⁽⁷⁾所収の神社の図面より抽出したものである。本来ならば、三千百三十二ある⁽⁸⁾という式内社を抽出してその面する方位をもとに検討するのが本筋であろう。そして、集落の立地位置、形態、参道と集落軸の⁽⁹⁾関係をも含めて検討しなくてはならないと考える。たしかにそこまでデータを揃えることができればその集落、神社の構造にかかわる周辺地域のひとの内面的意識に関する要素を探ることを可能にするであろう。表1参照

ここでは参考資料として表1・図1を添えておく。

神道事典 全体

角 度	件 数
0~ 9	10
10~ 19	3
20~ 29	
30~ 39	
40~ 49	
50~ 59	
60~ 69	
70~ 79	2
80~ 89	4
90~ 99	8
100~109	8
110~119	12
120~129	10
130~139	3
140~149	6
150~159	14
160~169	8
170~179	15
180~189	42
190~199	24
200~209	25
210~219	11
220~229	15
230~239	3
240~249	7
250~259	3
260~269	3
270~279	8
280~289	2
290~299	10
300~309	1
310~319	4
320~329	6
330~339	2
340~349	1
350~359	3
合計件数	273

表1 神道大辞典の地勢図より作製。北を0°とし、時計まわりに角度を示す。

方位角度件数表

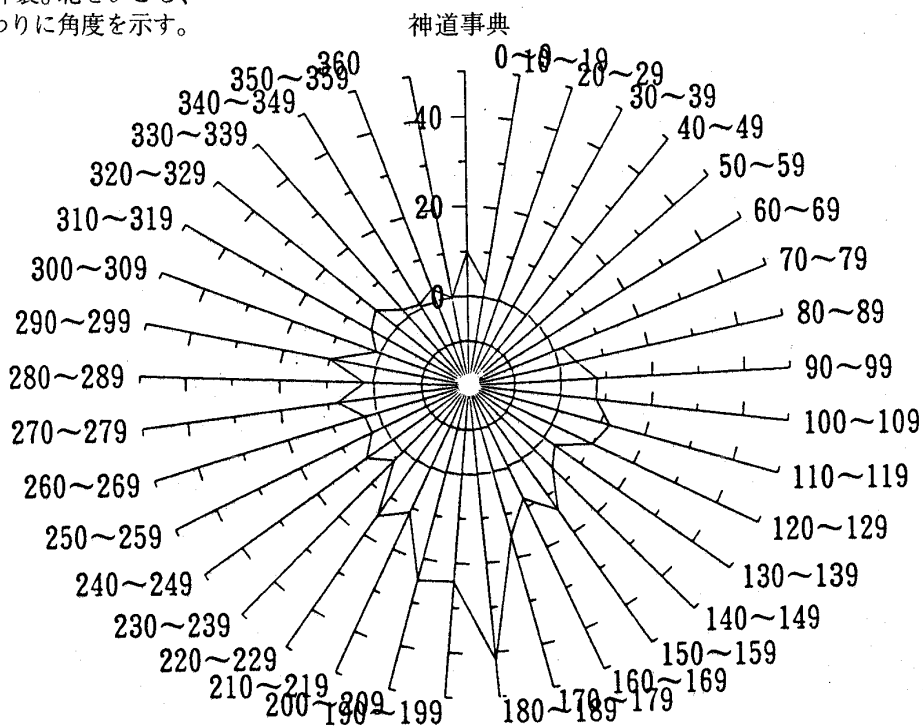


図1 先の表をレーダーチャートで示したもの。北から東に面している事例の少ないことが興味深い。

南」(「辰巳」)にあることを重視する構造を有することにつながり、家の奥の間の位置が「乾」(「西北」)にくる理由を説明できないのことに無関係ではない。なぜならばそこに地形・地勢にむけられていた人々の精神的関係の現れをみるからであり、またこの「辰巳」の対偶に位置する「乾」にも同様のことが考えられてくる。⁽⁶⁾つまり、地勢・地形と「家」の関わりの中で、「家」を外界に対してどういう構造を有するものと考えるかと言うことになる。それは、どんな粗末な家でも、また立派な家の場合でも基本的構造が同じと言うことから問われる問題でもある。

そういう意味において「家」を人のつくりだした内なる領域とし、「家」の外は人の考えの及ばない外なる領域、「異なる」領域と考えてみると、昔話などに示される異人の現れ来る領域、あるいは花祭りの祭事の中であれ、どこからか現れくる異装の存在は、人間中心の思考に対して大きな影響を与えていたことになる。全体の世界とその中の異物的な存在としての人間はこの世界をどの様に見、何をおそれ、何を畏敬したかを論じることになる。このことは大歳の来訪者といわれる、稀れ人のテーマにも通じ、さらに村、あるいは集落の「内」と「外」の概念に関わることになる。ここで扱おうとする祭祀空間を論じることの裏には、そのような異人のあらわれ来るべき領域と、内なる世界の接点をどのように捉え、意識するかを宇宙観の構造を考えることでもある。

ところで家は一軒一軒が内と外との関わりを有していると言う意

味において、集落の小型化したものという見方を可能にし、そうすることによって人々の内面的世界の考察が家、集落を通じて可能になると考えるのである。つまり、民家、集落の構造を考えることによって、そこに住む人間の意識を探ることができる。だが、それは、逆に言えば外なる世界に包まれた限定された領域におかれている人間のありかたを説明するものでもある。しかし「民家」の構造の多くは、地勢的、景観的理由、さらに衛生的側面などと言う現代的システムでのみ説かれようとしている。

民家の構造、そして集落における宗教的施設の位置、さらにその面する方位を考えて行つたとき、ある特定の方角が重視されていることは容易に把握できる。だが、今日のような都市化された状況のもとではこの方位の把握は簡単にはおこなえない。密集した家、区画化された街の中では家、地域の持つ世界観、宇宙観を読み取ることはもはやできなくなっている。

* * *

ここでは、「風水思想」を前提としたこれまでの民俗方位の考えに対して、一般民家の場合には「風水思想」だけでは理解しがたいものもあることから、「風水思想」と異なった「思想」が存在したのではなかったかという考えから始まる。それは各地の神社の面する方位が意識されたことである。つまり、個々にみれば「南面」していないにも関わらず、当然のごとく神社は「南面」するものと見なされていた意識との出会いである。この考え方によれば、神社は「南面」しなくてはならないものであり、そうでないものは地勢的

の背景にある固有の意識、意味づけを探る手だてをなくさせることになるからである。なぜならば、地域の人々の意識がこの段階で日常と非日常とに区別され、神事の一部が芸能として切り離されることになり、日常と祭礼との文化的脈絡を失ってしまうことになるからである。このことは日常と非日常の境界を鮮明にすることにもなる。これにより祭礼、あるいは神事という場を通して導入されていた非日常の世界を受け入れたり、それを探る手だてをなくしていくことに他ならない。この様な現状の問題をここでは論じるつもりはない。ただ、人々の意識の中で日常経験が合理化されていくことによって、空間構造にみる象徴的世界を読み取るすべを失っていったのみである。これは、昔からおこなわれてきた儀式の継続を通して伝えられてきた世界、日常と非日常の接点が見えなくなったことになる。それ故にここでは、祭に限らず日常と非日常の接点と見なしている位置、そしてそれにかかわる諸問題の検討を行いたい。

I

この論考はすでに発表している「水のコスモロジー⁽⁴⁾」で考察した異界という主題とパラレルの関係にある。つまり集落、家の構造の検討を通して、そこから地域の世界観、宇宙観についてふれて行くと考えられるものである。ここでは地域の、神社・寺院といった宗教的施設（墓地も含む）、集落そして民家の問題を日常と非日常との接点を探りながら、考えていこうとするものである。

さて、民家、そして集落はいうまでもなく自然と密接な関わりを有している。このことは地域的にある定まったパターンを集落が作り出していることにつながる。しかし、これらの集落についての説明は合理的であり、そこに住む人の内的意識についての考察はすくない。だが、樋口忠彦⁽⁵⁾のような景観から地形と結び付いた意識を問う視点は興味を覚えるもののその著作では地域の特殊性及びそこに住むものの内的意識が扱われていないのではないかと考える。たしかに民家、集落のもつ様式、型を地形・地勢的、景観的側面から見るとは容易であろう。この民家あるいは宗教的施設の位置づけを景観からのみ見るとすれば、そこに地形と結び付いていた人々の意識が問われなくなる可能性が出て来る。だが、この意識を探ることによってようやく境界の姿を明らかにでき、その居住空間によって、さまざまな地勢・地形に囲まれた外の空間に対する意識を捉え直すことを可能にするのである。それは、地勢・地形との間に人々の精神的な関係性が存在していたことをうかがわせるものであると同時に都市化によって、景観の中でも地形との間での精神的関係を失っていることを示すことになる。自然のあるがままの地形が人間の地形に変化を与える力を増すにつれてそれに対する感覚が失われていった、という樋口の指摘をさらに展開させなくてはならない。

人々のこの地形に対する感覚を喪失しているとすると指摘は地勢的状况を我々が読み取ることができなくなっている、という視点だけでは論じることができない。それは、家の外から内へ通じる道が「東

民俗にみる宇宙観

異界との接点を求めて

春日井 真 英

はじめに

なぜ神社は南に面しているのでしょうか。なぜ、集落の中心に設置されないのでしょうか。民俗の領域に手を染めはじめたときからこのような疑問につきまといわれてきた。この研究は、その疑問にたいする整理と考えておきたい。神社がどの方角に面しているのかと疑問をもったのは、北設楽の花祭り（霜月神楽）においてである。この祭礼の中で「乾」、「辰巳」に関わる言葉に出会ったことも無関係ではない。祭場の結界として「高根祭り」と「辻がため」を行うのに「乾」「辰巳」という方角をそれほどまでに重視するのは一体どういう理由からであったのか。なぜ、東とか西、あるいは南、北という方位が選ばれなかったのか。祭の中ではこの五方位はしっかり用いられているのに、祭の基礎となる神事の部分で五方位とは異なる方位が重視されるのはどうしたことなのであろうか。祭の祭

文からはじまった疑問は、さらに民家、集落そして宗教的施設の位置へとつながりはじめた。

これまでの研究の中で榊鬼、山鬼、朝鬼とよばれるものたちの飛び跳ねる祭祠空間に隠された世界観を探って来たわけだが、この空間が祭文によって構築され、確認され、人間と人間ならざる異装のものとの共有する場として意識され、彼ら人間ならざるものたちによって祝われた空間が祭事をつうじて人間に引き継がれ、人間にもたらされた「場」、「空間」としてひらかれ、神楽のクライマックスとなっていく過程をみた。この過程は、花祭が「生まれ浄まり」の場と説かれること、そして祭祀儀礼の分析から可能となる。

*

現在では、祭に対する意識がはっきりしていないといつてよい。それは良い意味でも、また悪い意味でも祭が芸能として見られるようになったことと無関係ではない。祭りの一部を芸能化することによってその元にある神事、祭礼とのかかわりを見えなくさせ、祭り